

第 2 回 条件付き確率とベイズの定理

鈴木 譲

以下では、1つの確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) を仮定する。

$A, B \in \mathcal{F}$ として、 $P(B) > 0$ のとき、 $P(A \cap B)/P(B)$ を B のもとでの A の条件付き確率といい $P(A|B)$ とかく。また、 $P(A \cap B)$ を A, B の同時確率という。

また、 $P(A \cap B) = P(A)P(B)$ のとき、 $A, B \in \mathcal{F}$ は独立であるという。

定理 1 $n \geq 1$ として、 $P(A_0 \cap \cdots \cap A_{n-1}) > 0$ のとき、

$$P(A_0 \cap \cdots \cap A_n) = P(A_0)P(A_1|A_0) \cdots P(A_n|A_0 \cap \cdots \cap A_{n-1}) \quad (1)$$

証明: $P(A_0) > 0$ のとき、 $P(A_1|A_0) = \frac{P(A_0 \cap A_1)}{P(A_0)}$ が定義でき、 $P(A_0 \cap A_1) = P(A_0)P(A_1|A_0)$ がいえる。 n で定理が正しいと仮定すると、 $n+1$ の仮定 $P(A_0 \cap A_1 \cap \cdots \cap A_n) > 0$ が成立するとき、「1. 事象と確率」定理 5 と $A_0 \cap \cdots \cap A_n \subseteq A_0 \cap \cdots \cap A_{n-1}$ より、 $P(A_0 \cap \cdots \cap A_n) \leq P(A_0 \cap \cdots \cap A_{n-1})$ 、すなわち $P(A_0 \cap \cdots \cap A_{n-1}) > 0$ が成立し、(1) が成立する。また、

$$P(A_0 \cap \cdots \cap A_{n+1}|A_0 \cap \cdots \cap A_n) = \frac{P(A_0 \cap \cdots \cap A_{n+1})}{P(A_0 \cap \cdots \cap A_n)} \quad (2)$$

が定義できるので、(1)(2) より、

$$P(A_0 \cap \cdots \cap A_{n+1}) = P(A_0)P(A_1|A_0) \cdots P(A_{n+1}|A_0 \cap \cdots \cap A_n)$$

定理 2 $B \in \mathcal{F}$ を、 $P(B) > 0$ とすれば、 $(\Omega, \mathcal{F}, P(\cdot|B))$ は確率空間をなす

証明: $P(A \cap B) \geq 0$ より、 $P(A|B) = \frac{P(A \cap B)}{P(B)} \geq 0$ 。また、 $P(\Omega|B) = \frac{P(\Omega \cap B)}{P(B)} = \frac{P(B)}{P(B)} = 1$ 。さらに、 A_1, A_2, \dots が排反であれば、 $A_1 \cap B, A_2 \cap B, \dots$ も排反であるので、

$$\begin{aligned} P(A_1 \cup A_2 \cup \cdots | B) &= \frac{P((A_1 \cup A_2 \cup \cdots) \cap B)}{P(B)} = \frac{P((A_1 \cap B) \cup (A_2 \cap B) \cup \cdots)}{P(B)} \\ &= \frac{P(A_1 \cap B)}{P(B)} + \frac{P(A_2 \cap B)}{P(B)} + \cdots = P(A_1|B) + P(A_2|B) + \cdots \end{aligned}$$

したがって、「1. 事象と確率」の (4)(5)(6) が成立する。

定理 3 排反な $A_1, A_2, \dots \in \mathcal{F}$ が $P(A_1) > 0, P(A_2) > 0, \dots$ および $A_1 \cup A_2 \cup \cdots = \Omega$ を満足するとき、各 $B \in \mathcal{F}$ について、

$$P(B) = P(A_1)P(B|A_1) + P(A_2)P(B|A_2) + \cdots$$

証明: $A_1 \cap B, A_2 \cap B, \dots$ は排反であるので、

$$P(B) = P((A_1 \cup A_2 \cup \cdots) \cap B) = P((A_1 \cap B) \cup (A_2 \cap B) \cup \cdots) = P(A_1 \cap B) + P(A_2 \cap B) + \cdots$$

また、 $P(A_1) > 0, P(A_2) > 0, \dots$ より、 $P(B) = P(A_1)P(B|A_1) + P(A_2)P(B|A_2) + \cdots$

定理 4 排反な $A_1, A_2, \dots \in \mathcal{F}$ が $P(A_1) > 0, P(A_2) > 0, \dots$ および $A_1 \cup A_2 \cup \dots = \Omega$ を満足するとき、 $P(B) > 0$ なる $B \in \mathcal{F}$ について、

$$P(A_j|B) = \frac{P(A_j)P(B|A_j)}{P(A_1)P(B|A_1) + P(A_2)P(B|A_2) + \dots}, j = 1, 2, \dots$$

証明: $P(A_j|B) = \frac{P(A_j \cap B)}{P(B)} = \frac{P(A_j)P(B|A_j)}{P(A_1)P(B|A_1) + P(A_2)P(B|A_2) + \dots}$ より成立。

定理 5 $A, B \in \mathcal{F}$ が独立で、 $P(B) > 0$ であれば、 $P(A|B) = P(A)$ 。

証明: $P(A \cap B) = P(B)P(A|B)$ および $P(A \cap B) = P(A)P(B)$ より成立。

例 1 硬貨とサイコロを同時に投げる。標本空間をつくり、硬貨のおもてでの確率を求めよ。ただし、硬貨のおもてうら、サイコロの各目は独立に等確率で生じるものとする。

$$\Omega = \{(i, j) | i = 0, 1, j = 1, \dots, 6\}, P(\{(i, j)\}) = \frac{1}{12}, A = \{(0, j) | j = 1, \dots, 6\}, P(A) = \sum_{j=1}^6 P(\{(0, j)\}) = 6 \cdot \frac{1}{12} = \frac{1}{2}$$

例 2 大小の 2 個サイコロを投げる。大きいサイコロの目が 3 である事象、両方の目の和が偶数である事象をそれぞれ A, B で表すならば、 $P(A \cap B) = P(A)P(B)$ が成り立つことを示せ。ただし、それぞれのサイコロで各目が等確率で生じるものとする。

$\Omega = \{(i, j) | i, j = 1, \dots, 6\}, A = \{(3, j) | j = 1, \dots, 6\}, B = \{(i, j) | i + j \text{ が偶数}\}, A \cap B = \{(3, 1), (3, 3), (3, 5)\}$ より、 $|\Omega| = 36, |A| = 6, |B| = 18, |A \cap B| = 3$, したがって、

$$\frac{1}{12} = P(A \cap B) = P(A)P(B) = \frac{1}{6} \cdot \frac{1}{2}$$

となり、事象 A, B は独立。

例 3 $\Omega = \{1, \dots, 12\}, P(\{\omega_j\}) = 1/12, j = 1, \dots, 12$ として、 $A = \{1, 2, 4, 12\}, B = \{1, 2, 5, 6, 7, 8\}, C = \{1, 5, 6, 7, 9, 12\}$ の各対は独立か。

$A \cap B = \{1, 2\}, B \cap C = \{1, 5, 6, 7\}, C \cap A = \{1, 12\}, |A| = 4, |B| = 6, |C| = 6, |A \cap B| = 2, |B \cap C| = 4, |C \cap A| = 2, |\Omega| = 12$,

$$\frac{2}{12} = P(A \cap B) = P(A)P(B) = \frac{4}{12} \cdot \frac{6}{12}$$

$$\frac{4}{12} = P(B \cap C) \neq P(B)P(C) = \frac{6}{12} \cdot \frac{6}{12}$$

$$\frac{1}{6} = P(C \cap A) = P(C)P(A) = \frac{6}{12} \cdot \frac{4}{12}$$

となり、 A, B は独立、 B, C は独立ではない、 C, A は独立。

例 4 $A, B \in \mathcal{F}$ が排反であって、 $P(A) > 0, P(B) > 0$ のとき、 A, B が独立にはなりえないことを示せ。

$A \cap B = \phi$ より、 $0 = P(A \cap B) \neq P(A)P(B) > 0$ が成立する。

例 5 $A_1, \dots, A_n, B, C \in \mathcal{F}$ が $P(A_1) > 0, \dots, P(A_n) > 0, P(B) > 0, P(C) > 0$ のとき、 $P(A_j), P(B|A_j), P(C|B \cap A_j), j = 1, \dots, n$ を用いて、 $P(C|B)$ を表わせ。

$P(C|B \cap A_j)P(B|A_j)P(A_j) = P(C \cap B \cap A_j), P(B|A_j)P(A_j) = P(B \cap A_j)$ より、

$$P(C|B) = \frac{P(C \cap B)}{P(B)} = \frac{\sum_{j=1}^n P(C|B \cap A_j)P(B|A_j)P(A_j)}{\sum_{j=1}^n P(B|A_j)P(A_j)}$$